論文

観光案内図の図像学
――吉田初三郎《嚴嶋新案内》と近世の厳島――
Iconography of Tourist Map

日並彩乃*
HINAMI Ayano

YOSHIDA Hatsusaburo（1884-1955）, who drew many Bird's-eye Views against the background of the spread of railways in the Meiji era and the travel boom of the Taisho era, was popularly known as the Hiroshige of Present Age. It was commissioned by railroad companies, hotels, and local governments in various regions. His works were mass-produced and used as tourist maps. However, his first one was drawn in an Art Nouveau style. This paper analyzes his one of Itsukushima, which was printed and published in 1915, and elucidates how he got rid of the Art Nouveau style to create the Hatsusaburo style.

キーワード：吉田初三郎（YOSHIDA Hatsusaburo）、観光案内（tourist maps）、鳥瞰図（Bird's-eye View）、厳島（Itsukushima）、観光（Tourism）

1.　はじめに：問題提起

吉田初三郎（1884～1955）は、洋画家になることを夢見て、関西美術院の鹿子木孟郎（1874～1941）のもとで学んでいたが、大正二年（1913）に描いた《京阪電車御案内》が皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）に嘉賞されたことを切っ掛けに、一転して「日本全國名所圖繪の完成」を目標と定め、「社會の爲に働く應用藝術家」となる決意を固めた（吉田, 1928）。「初三郎式鳥瞰図」は、観光案内図として印刷され、明治時代の鉄道の普及と大正時代の好景気の中で起こった旅行ブームに貢献した。

大正三年（1914）、『京都日出新聞』と『大阪時事』で、歌川広重（1797～1858）に準えて紹介され、「大正の広重」と呼ばれるようになった。事実、「初三郎式鳥瞰図」には、五雲亭貞秀（1807～1879）など浮世絵の影響が指摘されている（堀田, 2009）。ところが、「初三郎式鳥瞰図」のはじまりである「京阪沿線の名所圖繪」は「ヌーボー式圖案風」、すなわちアール・ヌーヴォー風に描いたと初三郎自身が証言しており（吉田, 1928）、矛盾が生じている。考え得るのは、何らかの近世絵画を参考として、西洋風から日本風へと様式を変化させて「初三郎式鳥瞰図」が確立されたという仮説である。

これを立証するためには、作品分析を積み重ね、変遷を明らかにする必要がある。鳥瞰図は地理学や都市工学、

図-1　吉田初三郎《嚴嶋新案内》

*大阪観光大学観光学部・関西大学文学部/美術史

観光学、歴史学などにおいて、当時の景観が正確に記録された資料として注目されてきたが、彼を「應用藝術家」と捉えるならば、「初三郎式鳥瞰図」は彼にとって絵画ということになる。そうであるならば、美術史の図像学が、この課題に貢献することができる。

以上を前提として、本稿は《京阪電車御案内》の 2 年後、大正四年（1915）に印刷・発行された《嚴嶋新案内》［図-1］を考察する。厳島は、江戸時代に名所風俗図として描かれるようになり、庶民の旅行が流行するに従って、一枚刷りや名所図会へと発展したため、図像が数多く遺されている。これらと本図を比較することにより、仮説の証明を試みることが可能であると考える。本稿の目的は、アール・ヌーヴォー風から如何にして脱出し、「初三郎式鳥瞰図」が生み出されてゆくのかを解明することにある。

2.　《嚴嶋新案内》の作品分析

(1)　形式と主題

形式は、縦 15 ㎝×横 73 ㎝で、両面印刷のリーフレットである。蛇腹状に折り畳まれていたため、8 面になるよう折り目がついている。表紙と裏表紙、「嚴嶋十二勝」の写真、厳島の特徴を文章で紹介する「嚴島要覧」が表面に、厳島の鳥瞰図が裏面に掲載されている。表紙と裏表紙は連続しており、花をあしらった格子模様を背景として、琵琶を象った中に、貴族の家族をやまと絵風に描いている。「嚴島要覧」は、厳島の地理、地勢、歴史、自然、土産などを 3,000 字程度で纏めてある。単に事実を述べるのではなく、嚴嶋神社の燈籠の奉納や神楽の鑑賞、宝物拝観などに必要な料金を明解にしている。裏表紙には「初三郎画」、朱文楕円印風の「よしだ」の落款と、刊記［図-2］がある。これによれば、小川□が編輯と発行を務め、アルモ印刷合資會社の菊山嘉市によって大正四年四月八日に印刷、同年同月十三日に発行された。「大賣捌」は 4 か所あり、藤田□○堂のみ廣島市内で、瀬田春錦堂、岩惣物産部、福壽堂は島内にある。したがって、厳島の個人商店で、「定價金拾五銭」で販売され、観光案内図として使用されたと考えられる。

裏面の鳥瞰図は、8 面を貫いて、やや上部に水平線を設定し、厳島を大きく描く。地名や施設名を明記した短冊が、図中に 151 か所ある[1]。以下、必要に応じて補足を加えながら、「嚴島要覧」に基づいて、主題を述べる。短冊に記された場所は、本図の表記に倣い、**太字**で記す。

厳島は、周囲約 30km の小さな島で、広島湾の北西部に位置し、広島県廿日市市宮島町に属する。画面左上に**櫻尾城趾**、画面左下に**宮嶋驛**、画面右下に**玖波**、**大竹**、**新湊**、**浦が濵**があるから、本州上空から島の北面を俯瞰しており［図-3］、画面上部に描き込まれた方位と一致する。島の周囲には、**似島**、**つくね嶌**、**大なさび**、**小なさび**、**江田島**、**かべ島**など瀬戸内海の多島美を象徴する島々が浮かんでいる。

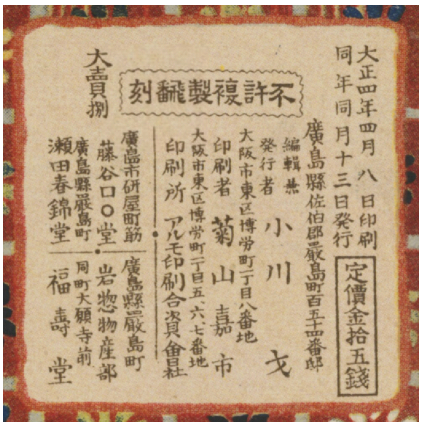

図-2　《嚴嶋新案内（部分）》

画面上部の四角い枠は右から、江戸時代の国学者である本居宣長の和歌と儒学者である菅茶山の漢詩、厳島観光の「順路」、厳島に至る「交通」が記されている。和歌の前には、「安藝のくにいつく島の図いとくはしくかきたるを見て」という前提があり、宣長は「めのまへに見るこゝちしていつきしまいつ来ぬらんとたとるうつし絵」と詠む。茶山は「彩舟銜尾倚汀沙　隠映仙山五色霞　壖内潮回廊九曲　街頭鹿狎市千家　諸平威燄悲黄土　二帝宸遊想翠華　懐古何人同此意　四隣歌吹徹霄譁」という七言律詩である。

「交通」の内容は以下である。

[1] 本稿は、「絵入本ワークショップ XIII（2022 年 12 月 10 日（土）11 日（日）、Zoom）」において発表した「吉田初三郎『嚴嶋新案内』における厳島図の影響について」に加筆・修正したものである。同ワークショップで発表した際は、嚴嶋神社「御本社」の参拝順路を短冊に含めて 152 か所と述べたが、これは画面上部の四角い枠と同類と判断し、151 か所に訂正する。

鐵道院ノ連絡船ハ宮島駅ノ舞降客ヲ十五分間ニ厳島ニ送迎スル㆓丁昼夜卅回（外ニ普通ノ通船モアリ）大阪商船ノ汽船ハ東ハ大阪、神戸、髙松、多度津、鞆、尾ノ道、糸崎、呉、宇品、等ヨリ西ハ門司、下関、三田尻、柳井、岩國、等ヨリ毎日一回厳島ニ寄港ス、尼崎汽船マタ同ジ又別ニ別府往復ノ汽船アリ一睡ノ間ニ旅客ヲ送迎スベシ〇廣島ヘハ汽車十三哩五、西方己斐駅ニ下車スレバ電車アリ市中ニ通ズ又宇品ヨリスル者ハ御幸橋ヨリ電車ノ便アリ〇岩国錦帯橋ヘハ宮島駅ヨリ十二哩二ニシテ下車直ニ電車アリ

大阪商船と尼崎汽船が厳島に寄港し始めたのが明治二十六年（1893）、山陽鉄道が**宮嶋驛**を開業したのが明治三十年（1897）、山陽鉄道が宮島渡航会社宮島口－厳島航路を買収し、**厳嶋桟橋**の営業を開始したのが明治三十六年（1903）である（宮島町, 2005）。『大阪商船株式会社航路案内』（原田編, 1903）によれば、上記のルートに登場する発着地と寄港地がすべて含まれているのは、瀬戸内海七航路のうち大阪下関線である。鳥瞰図が描かれたときに厳島を訪問する手段は、鉄道と船を乗り継ぐか、あるいは汽船を使用するかのいずれかであった。鳥瞰図には、**厳嶋桟橋**から**鐵道院桟橋**までの連絡船、汽船が着岸する**商船桟橋**と、社旗が掲げられた**大阪商船支店**、**御笠濵**に**尼ケ崎**の文字がある。**宮嶋驛**から欄外へ延びる線路は、東は「廣島、岡山、姫路、神戸、京阪及ビ東海道其他」に、西は錦帯橋のある「岩國、下関、門司ヲ経て別府、耶馬溪、及ビ長崎、鹿児島方面」に通じている。

続いて、「順路」は、島に到着してからの徒歩である。

厳島桟橋ヨリ海岸通リヲ右ヘ右ヘト御笠濵ニ出デ（此間四五丁）東廻廊ヲ入リテ神社ニ詣デ西廻廊ヲ出デ、海岸ヅタヘニ大元ニ往キ（西廻廊ヨリ又四五丁）帰路ハ大元社前ノ石階ヲ登リ山手通リヲ紅葉谷ニ（此間約八九丁）夫レヨリ引返シテ千疊閣五層塔ト一巡スルヲ普通トス〇此圖左右端ヲ両端ヲ接合スレバ又御島廻リノ案内者タルベシ

俗謡ニイハク

安藝の宮島廻れば七里　七里な、浦な、ゑびす

鳥瞰図は、この道案内を視覚化している。**厳嶋桟橋**と**商船桟橋**の間に、**各旅舘待合所**がある。これは、明治三十年（1897）に開設された厳島桟橋待合所（宮島町, 2005）のことかもしれない。海沿いに歩き、旅館や商店が立ち並ぶ有の浦を通り抜ける。街には、**寶壽院**や**存光寺**などの社寺仏閣と、**町役場**、**警察署**、**郵便局**、**□場**、公園といった近代的な施設が入り混じっている。**□場**は、明神座（宮島劇場）を指すと思われる（角田, 1975）。「大賣捌」4 か所のうち、島内にある**瀬田店**、**岩惣物産部**、**福壽堂**の名も記されている。沿岸は整備されており、海には大小の舟が浮かぶ。応永十四年（1407）に建立された**五層塔**と、天正十五年（1587）に豊臣秀吉の発願で創建された**千疊閣**は、いずれも神社に次ぐ、島のランドマークである。これらが建つ亀居山の下には、明治三十九年（1906）に建設された石大鳥居と灯篭が立ち並び、その先に嚴嶋神社の**本社入口**がある。

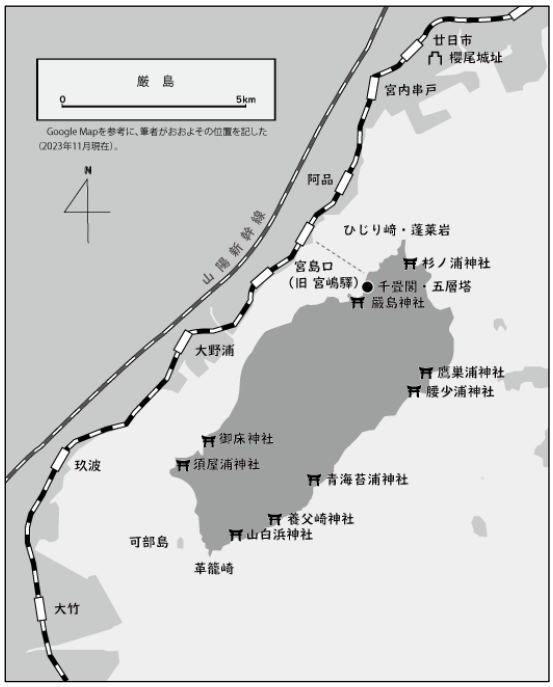

図-3　厳島の周辺地図

島自体がご神体であった厳島に神社が建てられたのは、推古元年（593）佐伯鞍職に因る。この佐伯鞍職を祀ったのが**三翁社**である。弘仁二年（811）に名神の例幣を受け、『延喜式神名帳』では名神大社に列している。仁安三年（1168）、嚴嶋神社を平家の守護神と定めた平清盛によって、ほぼ今日の規模に匹敵する社殿が造営された。歴代の天皇や上皇、法皇、親王が参拝し、源頼朝、大内義隆、豊臣秀吉、浅野長晟

ら名立たる権力者の崇敬を集めた。弘治元年（1555）、毛利元就と陶晴賢によって厳島合戦が起きる。毛利軍は、要害山に**宮ノ尾**城を築いて陶の大軍を誘き寄せ、**包が浦**に上陸して、**バクチ尾**を越え、陶の本陣を奇襲攻撃して勝利を収めた。**大江浦**にて陶が自刃し、**駒が林**で陶の某臣弘中隆兼が戦死した。城址は、整備され**要害公園**となった。その勝利ゆえに毛利家の信仰心は強く、現存する本殿は元亀二年（1571）に元就が改築したものである。

鳥瞰図は、島の主役である厳嶋神社を朱色鮮やかに描き出している。御本社は、本殿、幣殿、拝殿、祓殿の構造となっており、客神社と朝座舎が右横に、大国神社と天神社の両摂社が左横にある。約 196ｍの廻廊を屈曲させて、これらが繋がれている。**額殿**には、絵馬が掲げられていた。揚水橋、長橋、反橋が、社殿を島に結び付けている。正面の高欄をめぐらした高舞台を取り囲むように、平舞台と呼ばれる手摺の無い床がコの字型に伸びているが、本図では細かすぎるためか、コの字の隙間が潰れている。うっすらと左右の狛犬の輪郭線がある。平舞台の海へ突き出した部分を火焼前と云い、左右に門客神社と楽房、大鳥居に向かう先端に 3 つの灯篭がある。**西松原**側の繋がった 2 棟は、能舞台と能楽屋である。「御本社」の参拝順序が社殿のそばに添えてある。

> 厳島本社ハ正面ニ在リ左方ノ東廻廊ヲ入リテ先ヅ客社ニ詣デ朝座舎（社務所）ノ前ヲ廻廊ヅタヘニ本社ニ詣デ平舞臺ニ出デ、大鳥居等海上ノ眺メヲ縱ニシ西廻廊ヲ出ヅ此間反橋ノ左方ニ天神大國ノ両社アリ海中ニ能舞臺アリ廻廊百八間、間毎ニ金燈籠ヲ懸ク鏡池、康頼ノ石燈籠等名高シ

上記に違わず、建築は現実に忠実である。縮尺の関係上、金燈籠を描き込むことはできないが、鏡池と康頼ノ石燈籠まで表現されている。

一方通行の厳嶋神社を通り抜けると、西廻廊の行き当たりに**大願寺**の山門がある。**御手洗川**の上部に、厳嶋神社の宝物を収める**寶庫**がある。細やかな家並みの中に**寶山社**の多宝塔が目立つ。そばには、**繪馬が嶽**山頂に向かう**登山鐵道登口**があるが、**登山鐵道**は**架設中**になっている。海際を進むと、**經ノ尾**、**キビヤ谷**を通り過ぎて、**大元公園**に至る。公園内の**宮嶋ホテル**は洋館だったが、大正四年（1915）十一月に焼失したため、ヤン・レツルの設計による新館が大正六年（1917）に落成し、主に外国人客を対象に営業を行うことになる（高橋, 1989）。

先述の「順路」に従って、**大元神社**から山手に入ると、**紅葉谷公園**に繋がる。岩国屋惣兵衛がここを整備し、植林を行って、安政元年（1854）から**岩惣旅館**を経営した。橙色と黄色に染まっているのは、紅葉の群生を示しているのだろう。一方で、島中に散らばる桃色の塊は桜を示すと思われ、春と秋が同時に存在している点が興味深い。ここから**千疊閣**と**五層塔**に引き返し、**嚴島桟橋**に戻るのが「順路」が示す「普通」である。

本図の中央に聳える**御山**は、島の最高峰である弥山を指す。**大聖院**の横を流れる川沿いに、登山道が整備されている。登山道には、**火消不動**、**瀧ノ宮**、**白糸滝**などがある。途中で通過する**幕石**は、島の主な地質である花崗岩が風化して生まれた奇岩である。**十八丁**目で**繪馬が嶽**、空海を祀る**奥の院**、**御山**山頂の**頂上岩**の三方向に分岐する。**御山**山頂に到達するまでに、**仁王門**、**御山神社**、**求聞持堂**がある。

本図の最大の特徴は、「順路」に記されたように「此圖左右端ヲ両端ヲ接合スレバ又御島廻リノ案内」になることである。御島廻りとは、海沿いに点在する厳嶋神社の摂社・末社である七浦神社を舟で一巡りする神事である。**御笠濵**を出発し、**杉ノ浦社**、**たかのす社**、**腰細浦社**、**青海苔浦社**、**山白濵社**、**スヤ社**、**御床社**を巡拝したあと、

図-4　《嚴嶋新案内（部分）》

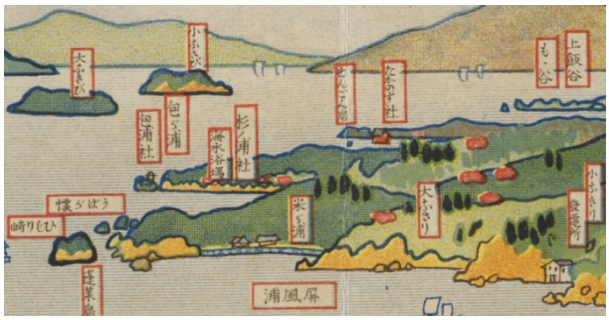

図-5　《嚴嶋新案内（部分）》

網ノ浦に上陸し、最後に**大元神社**に参拝する。嚴嶋神社の祭神が、烏に案内させて島を一周し、鎮座の場所を示したという伝説に倣っている。**養父﨑社**は、七浦神社に含まれていないが、この御鴉神を祀っている。初三郎は、これをひとつの鳥瞰図に収めるべく、島の最南端を**革籠嵜**ではなく、**腰細浦社**に改変している［図-4］。**腰細浦社**は**御山**を挟んで、嚴嶋神社の反対側にあるため［図-3］、北から見えることはない。同様に、最北端の**ひじり﨑**から**上飯谷**までが島の裏へと続くように描かれている点も、現実と異なる［図-5］。なぜなら、**たかのす社**は**腰細浦社**の傍にある。要するに、本図は**たかのす社**と**腰細浦社**の間で島の南面を切断し、それを左右に開いている。そのため、北面を基本として、左右に南面が混ざった状態となっている。これは、本図が文字に頼らずに、観光案内に必要なすべての情報を視覚的に提供しようとしていることを示している。

以上のような考察を経ると、本リーフレットは、観光客の視線に徹底し、厳島を実際に歩く際の実用性を意識ながら、一貫して厳島の歴史を案内している。

(2)　様式

《嚴嶋新案内》を描いた大正四年（1915）は、処女作からたった 2 年しか経っていない。『吉田初三郎先生作日本全國名所圖繪　蒐集目録』(1929）によれば、本図は 5 作目、後述するように、観光案内図に限れば 3 作目にあたり、制作経験が甚だ乏しい頃である。《京阪電車御案内》に対する皇太子裕仁親王の「是れは奇麗で解り易い、東京へ持ち歸つて學友に頒ちたい」という言葉は（吉田, 1928)、このような沿線案内図があり触れた存在ではなかったことを示している。逆に云えば、初三郎は、これを切っ掛けに全く異なる分野へと大きく舵を切ることになったが、見本となる作品はほとんど無かったと想定される。彼は、洋画を学ぶ前に友禅の図案を描いた経験があるので、そこで名所図会の存在を知っていた可能性はあるが、伝統的なそれではなく、鉄道沿線を名所図絵風に描く経験はそれまでに無かったであろうし、ましてや洋画の修練において名所図会は縁遠い。初三郎は、己の経験を頼りに、依頼のたびに暗中模索しながら、新たな挑戦を繰り返して、徐々に「初三郎式鳥瞰図」を形作ったはずである。

大正二年（1913）の《京阪電車御案内》が、彼の出発点である。左端 2 面の表紙と裏表紙は、和模様の中に扇面を散らし、その中に舞子の後姿と小枝に留まって光る蛍を描く。鳥瞰図は、鴨川と淀川に沿って敷設された京阪本線を中心として、沿線の景観と名所が俯瞰構図で描かれている。画面左が京都の五条、画面右が大阪の天満橋で、画面中央の中書島から宇治線が分岐している。三条大橋から、画面左上の琵琶湖に向かって、京津線が延びている。朱色の円形に駅を、長方形に名所を、文字で書き込んでいる。「ヌーボー式圖案風」に描いたと彼自身が証言している通り（吉田, 1928)、曲線を多用し、明度が高く彩度が低い色彩を面的に使用している。筆者は確

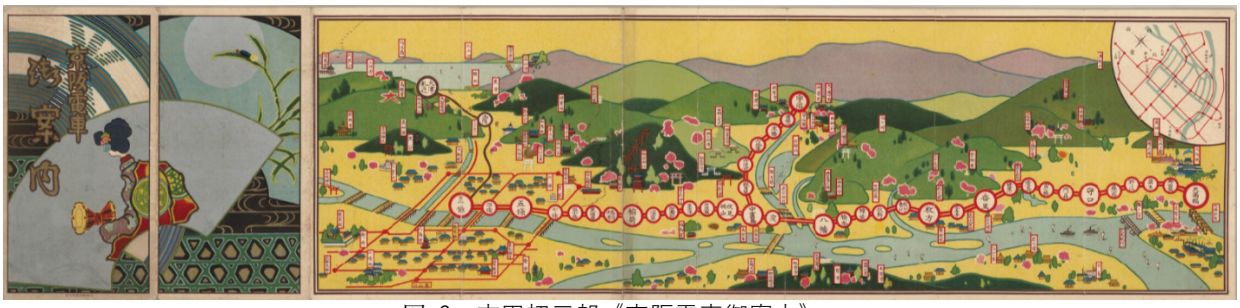

図-6　吉田初三郎《京阪電車御案内》

図-7　吉田初三郎《耶馬溪御案内》

認できていないが、裏面は、「京阪電車と各電車、および鉄道院線との連絡図、各種運賃案内、切符案内によって占められている」（堺市博物館, 1999 p.55）。本図の大型版［図-6］が大正四年（1915）に発行されており、2 作目に数えられている。大正四年版の裏面は、各駅の見所が文章で記載されている。次に述べる大正三年（1914）の《耶馬溪御案内》と順番が前後しているのは、名所や鉄道路線が加筆されているものの、大正二年版と大正四年版の図像が大きく変わっていないからであろう。

処女作が皇太子裕仁親王に称嘆されたという知らせを、初三郎が聞いたのは、大正三年（1914）、耶馬溪の写生旅行の最中だった（吉田, 1923）。発行者や発行年月日は記載されていないが、初期の画号である「眠虎」が記された《耶馬溪御案内》が 3 作目に該当するだろう。表紙と裏表紙の横には、旅館の名前が並んでいるだけで、文章は無い。旅館のひとつは、のちに支援者となった油屋熊八が経営する亀の井である。裏面［図-7］の紙面すべてを鳥瞰図に割いて、図をより大きく描くようになった。大分県の名勝である耶馬溪沿いに敷設された鉄道の沿線案内である。駅名の表記も長方形に統一されて小さくなり、風景をできるだけ阻害しないように配慮されている。彩度が低い面的な彩色はアール・ヌーヴォー風だが、山々は現実に即した個々の形態に描き分けることを意識し、グラデーションを用いて、立体感と奥行きを表現するようになり、図から絵へと志向を強めている。

この時期の依頼に関して、初三郎は以下のように記述している。

> 幸に天の加護を得て勇往邁進當時大阪商船會社要路の人々が、予の仕事を激勵聲援せらるゝあり、大正三年瀬戸内海沿岸の寫生に當りては別府温泉航海のクイン紅丸（現在の紫丸）を中心とし、耶馬溪、宮島、寒霞溪、道後温泉、琴平案内、高松屋島名所圖繪と順次公開するに至つたのである（吉田, 1923 p.6）。

大阪商船は、大阪を起点に瀬戸内海などを航行する船主が合同し、明治十六年(1884)に設立された。明治四十五年(1912)、別府温泉の開発を目的とした観光航路として大阪豊後線が就航し、最初に投入されたクルーズ船が、瀬戸内海航路の女王として君臨した紅丸である（大阪商船, 1934）。『吉田初三郎先生作　日本全國名所圖繪　蒐集目録』(1929) の記載を合わせて考えると、ここで挙げられている「耶馬溪」は《耶馬溪御案内》、「宮島」は《嚴嶋新案内》、「寒霞溪、道後温泉、琴平案内、高松屋島名所圖繪」は大正五年（1916）の《小豆島御案内》、《道後松山御案内》、《高松御案内》あるいは《高松屋島琴平御案内》とみて、間違いないだろう。これを踏まえると、《嚴嶋新案内》の大阪商船の描写が、ひと際詳しいことに納得がゆく。

4 作目の《京都鳥瞰圖》は、大正天皇の即位を記念して依頼されたもので、観光案内ではない。沿線案内は路線の形状に合わせた横長だったが、本図の縦横比は一対二程度に変更されている。西山の上空から、碁盤の目のような京都の町並みを俯瞰する構図は、黄華山《花洛一洛図》、五雲亭貞秀《京都一覧図畫》にみられるように、伝統的な京都の捉え方である。これまでのアール・ヌーヴォー風ではなく、写実的な描写となっており、画面左上に京都御所、上賀茂神社、二条城、右上に伏見桃山御陵、右下に大極殿、男山及び山崎付近、嵯峨の風景が写真を貼り付けたように描く点も特異である。本図が「鳥瞰図」と題された初めての作品で、初三郎自身も「近世日本に於ける都市のバーザイビューとして記録さるべき最初のもの」[2]という発言をしており（吉田, 1923 p.7）、それまでの沿線案内とは区別している。

本稿の主題である《嚴嶋新案内》は、これと同年の作品で、通算 5 作目、新案の観光案内図としては 3 作目になる。本図の印刷・発行は四月、《京都鳥瞰圖》の印刷・発行は十月となっている点で、順番に疑問が残る。ともあれ、観光を目的とする本図は、先の 2 つの沿線案内と同じ形式に戻った。再び地名と「案内」を組み合わせた表題となり、横長の紙面に両面印刷されたリーフレットである。その地域を象徴する絵を描いて表紙と裏表紙とし、表面に解説、裏面に鳥瞰図を配置する。折り畳んだ紙面を表紙と裏表紙の間に収納し、懐中できる大きさとなる。鳥瞰図の表現においても、記号的な描写やアール・ヌーヴォー風の彩色に引き返している。徐々に、立体感と空間表現を意識し、モチーフの細部に拘る傾向も引き継いでいる。

---

[2] ここで云う「近世」とは、歴史の時代の区分ではなく、初三郎にとっての近頃の世の中を意味するか、あるいは「近代」の誤字と思われる。

しかしながら、《嚴嶋新案内》は構図だけが大きく異なっている。《京阪電車御案内》は琵琶湖や宇治など画面上部に線路を延ばす一方、《耶馬溪御案内》は画面右の海に河が繋がる点で違いはあるが、どちらも山を背にして、大河を中心とし、川沿いに線路が走り、周辺に駅や見所、家屋や木々、桜がある。京阪電鉄と耶馬溪鉄道は全く異なる場所であるにもかかわらず、2 つの地域はそっくりに描かれている。《嚴嶋新案内》は、形式は沿線案内に従っているが、図像だけは踏襲することができなかった。なぜなら、島であったため地形が全く異なり、且つ鉄道沿線ではなかったからである。初三郎は、3 作目の観光案内図で、これまでの経験にない図像を求められ、描き方を変えることを余儀なくされた。「日本全國名所圖繪の完成」を目指した初三郎が、これを解決するために、厳島の名所図会を頭に浮かべただろうことは想像に難くない。

3.　《厳島新案内》と名所図の系譜

(1)　名所風俗図と真景図

「名所」の多くは歌枕に起源をもつが、厳島はそれを持っていない。にも関わらず、厳島は十七世紀前半に突如、名所風俗図の主題となった。久野（1989）は、史料に遺された記述から、豊臣秀吉の御用絵師である狩野光信（1565～1608）が、朝鮮出兵の際に前線基地を置いた名護屋と、豊臣軍の航海を守護する海の神としての厳島を描き、一双に組み合わせたことが一祖型だったと考えている。秀吉が島に二度参拝し、大経堂（**千疊閣**）を造営したのは、この時である。知念（2017）は、久野説を一歩進めて、光信がこの画題を成立させたと主張し、《厳島吉野花見図屏風》（メトロポリタン美術館蔵）の右隻［図-8］が失われた光信の図様を知る手掛かりであると云う。文禄三年（1594）に大規模な花見を行った吉野と厳島を一双に為すことは、やはり豊臣政権顕彰の意図があった（三宅, 2005）。時が経つにつれて、そのような意企は忘れ去られ、吉野、鞍馬など山間の聖地との組み合わせから、和歌浦、天橋立、富士・三保松原、琵琶湖、住吉、松島などの海辺のそれに代わってゆき、厳島本社の威容と参詣風俗の描写へと関心が移る。なお、厳島、天橋立、松島を一括りにする「日本三景」の概念は、寛永二十年（1643）に林鵞峰が『日本国事跡考』の中で「三處奇觀」と称したことが起源とされている。

図-8　《厳島吉野花見図屏風》うち右隻
メトロポリタン美術館蔵

知念（2017）は、厳島を描く屏風と襖が 63 件存在することを報告し、構図の観点から 2 種類に分類している。〈Ⅰ類〉は、海に浮かぶ島の北面全体を高い視点から広範囲にわたって俯瞰的に捉える類型、〈Ⅱ類〉は島の東方向から低い俯瞰視点で、本社を画面左半に寄せて拡大したそれである。前者は、作例数が多く、描写内容もバリエーションに富む。後者は、十七世紀後半以降の作例がほとんどを占めていることから後発と推測され、和歌浦との組み合わせに限る。

つまり、厳島の図像は〈Ⅰ類〉を主流としている。描く範囲や俯瞰の角度、描かれているモチーフなどは作品によってばらつきがあり、短冊の有無もまちまちだが、煌びやかな金雲の隙間から、嚴嶋神社は勿論、**千疊閣**と**五層塔**、**大願寺**、**大元神社**などの信仰を示すモチーフを垣間見せる点は共通している。神社の背後には鬱蒼とした森が生い茂る**御山**が聳え、木々の隙間から**白糸滝**が流れ落ちる。**御手洗川**へと注ぎ込み、海に繋がる。島を囲む紺碧の海には参拝者を乗せた舟が浮かび、有の浦には参拝客をもてなす店が犇めいた俗なる空間も併存している。時の流れと絵師の作意によって描写を変えつつも、遊楽する人々の風俗が生き生きと描かれる。右左隻で異なる名所を組み合わせる場合、厳島は春を象徴する桜が描かれた。

この時点で、厳島を表す基本的な構成要素は出揃っているが、名所風俗図は、あくまで厳島を象徴するモチーフを組み合わせることによって、約束事としての場所を表象にしたに過ぎない。現実の厳島の位置や地形には無

頓着で、虚実が入り混じった理想郷が表現されており、実在する厳島を描き出しているわけではない。

厳島の名所風俗図に大きな影響を与えたのが、岡岷山（1734～1806）の《厳島図》（神戸市立博物館蔵）である。本図は、厳島の北面と南面とをそれぞれ一巻に表している。横長の画面を活かして、現実の島の形を写し取っており、短冊は廃された。北面図［図-9・10］は最北端を**ひじり﨑**の**蓬莱島**、最南端を**革籠嵜**とし、南面図は左右が逆になる。本図は、〈Ⅰ類〉の構図を引き継いでいるが、水平線を画面上部に定め、**似島**などの周辺の島々を書き加えることによって、現実感を増している。前景を濃く、遠景を淡く描くことによって、奥行きある自然な空間を表現している。金雲を廃した、塗り残しによる雲の表現は、朝靄あるいは靄を思わせる。名所風俗図では、海岸線の主要な景物と島の中心の山だけを描いて、その間の地域を省略していたが、本図は、事物を地形に相応しいスケールに整え、民家まで描写している。縮尺の都合上、人物が明確に視認できる距離であるはずがなく、風俗描写は後退する。岷山は、狩野派の画法と新来の明清画を学んで、藩命により領内各地を観察写生して、多くの真景図を描き、七代広島藩主浅野重晟の文教活動に尽力した（黒川, 1990）。巻物形式であることを考え合わせると、おそらく本図もこのような公務の一端であり、名所風俗図ではなく、景観の克明な記録だと考えられる。

《厳島図屏風》（大聖院蔵）は、岷山の北面図をもとに制作されたことが指摘されている（菅村 2013）。金泥で名称が書き込まれており、風俗描写も受け継ぎながら、島は現実的な形状を獲得している。名所風俗図の伝統に写生を持ち込んで、厳島の現実性と視覚的な合理性を調和させている。

図-9　岡岷山《厳島図》二巻うち北面（部分）
神戸市立博物館蔵

図-10　岡岷山《厳島図》二巻うち北面（部分）
神戸市立博物館蔵

(2)　『藝州嚴島圖會』と《嚴嶋新案内》

元禄頃（1688～1703）になると、旅の大衆化と印刷技術の進歩などを背景に庶民の間でも社寺参詣を目的とする旅が行われるようになる。写生に基づいて描かれた『都名所圖會』が安永九年（1780）に出版されたことを切っ掛けに、寛政八年（1796）から文化三年（1806）頃までを第一次、天保五年（1834）から幕末頃までを第二次として、二回の「名所図会」ブームが興った（名古屋市博物館, 1988）。厳島に関しても名所記や案内記、名所図会、一枚刷りの絵図などが刊行され、多くの庶民が訪れることができる現実の場所となった。

『藝州嚴島圖會』は、「嚴嶋圖會」五巻、「厳島寶物図会」五巻から成る。天保十三年（1842）に世並屋伊兵衛によって出版された。編者の岡田清は、安芸広島藩に仕え、近藤芳樹に学んだ国学者である（上田正昭ほか監, 2001）。芳樹が執筆した「嚴島圖會序」よれば、日本各地に名所図会が次々現れたので、厳島の図会も作ろうという志を抱いた宮崎之意が清に相談し、清が芳樹に助力を請い、調査して書にしたものを、公に出版することになった。「凡例」によると、本書に先んじて出版された『嚴嶋道芝記』の画図が少なく、内容も不充分なので、「凡島の内に管ることハ、鎖細も漏さず、真景を写して圖を設け、實録を考へて事を記し、看官をして眼前に瞭然たらしむ」ことが信条だった。

本書巻之一の冒頭に所載されている「嚴島全圖」は、見開きを一図とし、八頁を並べると、厳島全体を俯瞰した図となる。描いたのは、広島藩の絵師を務めた山野峻峰斎（1784～1852）である。「表一・二・三・四」［図-10］は嚴嶋神社を中心とした北からの眺め、「裏一・二・三・四」は南からのそれである。本図は、明らかに岷山作を踏襲している。同書の中で触れられてはいないが、広島藩士であった彼らが岷山を知らなかったとは考えられない。

図-11　岡田清編・山野峻峯斎画『藝州嚴島圖會』巻之一「嚴島全圖　表一・二・三・四」
早稲田大学図書館蔵

《嚴嶋新案内》と「嚴島全圖」を比較すると、多くが一致する。まず、「表一・二・三・四」のやや上部に水平線を設定し、北面から眺めた厳島を大きく描き、周囲には島が点在し、画面右下に本州の**玖波**、**大竹**、**新湊**、**浦が濵**を配する図像が酷似する。次に、短冊に注目すると、「表一・二・三・四」には 41 か所、「裏一・二・三・四」には 39 か所ある。正確に云えば、**玖波**、**かべ島**、**革籠嵜**、**求聞持堂**、三鬼神、**ひじり崎**が表と裏に重複しているので、74 か所になる。うち、55 か所が《嚴嶋新案内》と一致する。《嚴嶋新案内》には、**大しやり浦**、**かしの木浦**、**藤が浦**、**さぬき浦**、**長浦**、**大江浦**などの多くの浦が描かれているが、これら海岸線の地名は「嚴島要覧」で触れられていない。「嚴島全圖」にもこれらが掲載されているが、例えば、洲屋社の横に「山白濵より三十二丁」とあるように諸所に距離が記載してある。これは、厳島周辺の海上を舟で移動したためであろう。海岸沿いの**菓子盆岩**、**ゑぼしが岩屋**、**たゝらがた**などの奇岩は舟で訪問する際の目印になる。これらが《嚴嶋新案内》に記されているのは、鉄道が敷設され、連絡船が整う前に描かれた「嚴島全圖」の名残であると想像する。そして、「表一」には、国学者本居宣長の和歌と儒学者管茶山の漢詩が並んで掲載されいるのだが、これも《嚴嶋新案内》のそれと一致している。ただし、「嚴島全圖」では、宣長の和歌の前提として、「安藝のくに人末田芦麿がもとよりかの国のいつく島の図のいとくはしくかきたるをおくりけるをみて」と書かれている。それが、《嚴嶋新案内》では、「人末田芦麿がもとより」と「をおくりけるを」を削って、文脈を変えてある。「末田芦麿」とは、本居宣長に入門した広島の薬種商の末田稲麿のことであろうか（上田正昭ほか監, 2001）。それは判然としないが、初三郎は有名な宣長だけに絞ったのかもしれない。これほどの一致を鑑みると、初三郎が「嚴島全圖」を参照したという直接の証左は見つかっていないが、可能性は極めて高い。

ところが、図の細部においては、異なる部分がある。明治元年（1868）に布告された神仏分離令によって、嚴嶋神社の鐘楼や文庫などは取り壊され、神社の修理と造営を一手に担っていた**大願寺**と、神社の別當寺を務めた**大聖院**は廃された。一方で、嚴嶋神社は、明治四年（1871）に国幣中社、明治四十四年（1911）に官幣中社へと昇格し、仏教要素を剥奪された**千疊閣**、**五層塔**、多宝塔を所有した。《嚴嶋新案内》の風景は、このような明治時代の変化を取り入れて、「座主」だった短冊を**大聖院**に改め、鐘楼も文庫も削除している。**雪舟園**は、元は大聖院の僧坊のひとつである西方院だったが、この時に廃寺となり、第五師団長野津中将の別荘となっていた（菊竹倉二・神田俊也, 1952）。雪舟の作と伝承される林泉があるため、この短冊が付けられたのだろう。初三郎は、画面左下に本州の**宮嶋駅**を描き加え、そこから**鐵道桟橋**と**商船桟橋**へと繋げることによって、交通の近代化を表現した。桟橋より北には、**長濵神社**、**長濵公園**、**海水浴場**、**小学校**、**發電所**などがある。**長濵神社**は七浦神社に含まれるため、島の北端を視野に入れた名所風俗図では、この神社のみを描いて周辺の描写を省略するのが常であったが、初三郎はこの地域を描出して、近代施設にも短冊を付けている。すなわち、初三郎は、近世の厳島の景観に、近代以降に建設された施設を付け加え、必要に応じて短冊の名称を改めることによって、表題の通り、厳島の新しい案内に仕立てている。

4.　量産される厳島絵図と「初三郎式鳥瞰図」誕生の兆し

髙橋（2002）は、土産物として木版で大量生産され、販売されていた一枚刷りの絵図を「厳島絵図」と定義して、江戸時代のものを 30 種報告し、今日でいうところの「観光ガイドマップ」と指摘している。制作年が最も古いのは寛政二年（1790）で、新しいのは慶応二年（1866）である。中には、特定の場所や建造物・行事などを単

独で描いた絵図も存在するが、多くは信仰の対象としての島を主題としており、精疎の差はあるが、先述の知念（2017）による分類〈Ⅰ類〉の嚴嶋神社付近を近接拡大したものが多い。

厳島絵図は近代へと継承され、明治・大正時代になると、銅版・石版に印刷方法を変えて量産され続ける。「真景」という言葉が入っている表題が多いが、これは必ずしも厳島を写生したわけではなく、西洋に学んだ写実的な作風を指しているのだろう。中西（2010）は、明治三年（1870）から昭和十三年（1938）までの 66 件を整理し、3 つに分類している。〈類型Ⅰ〉が嚴嶋神社を主題とした社寺境内図の一種とも云えるもので、〈類型Ⅱ〉が厳島全体を主題としたもの、〈類型Ⅲ〉が弥山を主題としたものである。〈類型Ⅲ〉はさておき、〈Ⅰ類〉をそのまま引き継いでいるのが〈類型Ⅱ〉、〈Ⅰ類〉の嚴嶋神社周辺をクローズアップしたのが〈類型Ⅰ〉になる。つまり、〈類型Ⅰ〉は、上記の木版画を踏襲したものである。

本稿において重要なのは〈類型Ⅱ〉で、さらに 2 種類に分かれる。1 つ目が、島の南北面を表裏の 2 枚に分けた写実的な銅版画で、明らかに岷山作を踏襲している。2 つ目が『藝州嚴島圖會』の「嚴島全圖」に酷似した明治四十三年（1910）の《大日本三景安藝嚴島全圖》である。観光案内の用途に最適化するため、靄を取り除き、全貌が明瞭に視認できるようになっている。**櫻尾城趾**、**玖波**、**大竹**、**新湊**、**浦が濵**といった本州を取り除いて、島のみを描いており、彩色が施されているため一見印象が異なるが、描写は「嚴島全圖」に忠実である。短冊の数が大幅に減少しており、遺されているのは、**頂上岩**、**求聞持堂**、**大願寺**、**大元社**といった名所に限られる。画面右上には中納言持豊の和歌「海原やまたもたくひは波のうへみや居しめたる厳島かな」、画面左上には頼春水の漢詩「雖愛雲光薄　尚知嵐氣遮　穿林観瀑水　度嶺遇麝麞　松偃堪為棧　巖懸自作家　樵童華表外　拍手喚神鴉」が記してある。これも『藝州嚴島圖會』に掲載されていて、前者は「本社客人社」の挿絵上部、後者は「嚴島全圖」の「裏三」の「登彌山」と題されたに五言律詩と全く同じである。

中西（2010）は、《大日本三景安藝嚴島全圖》を参考にして、大正十二年（1923）の《大日本三景安藝嚴島案内地圖》が描かれたと推測し、コミックな対象の描写が初三郎の鳥瞰図に似ていると指摘しているが、この 2 つの間に《嚴嶋新案内》が存在する。《嚴嶋新案内》は、《大日本三景安藝嚴島全圖》よりも描写が細かく、「嚴島全圖」に近い。《大日本三景安藝嚴島案内地圖》は、色彩や描写に加え、《嚴嶋新案内》と同じく地形を歪めて御島廻りを表現しているため、《嚴嶋新案内》が影響を与えたと筆者は推測する。しかしながら、江戸時代の風景のままの《大日本三景安藝嚴島全圖》に対し、すでに述べたように《嚴嶋新案内》が当時の時勢を取り入れて、厳島を絵画化している点は異なる。これは、案内図としての実用性を満たそうとした強い拘泥の表れであろう。初三郎は、《嚴嶋新案内》を片手に、島内を歩いて観覧すること強く意識している。**御山**の登山道の丁石を記しているのも、実際に登ることを想定しているからである。観光案内図としての出来栄えは、徹底して利便性を追求している初三郎に軍配が上がる。

とは云え、このような厳島図の変遷を踏まえると、《嚴嶋新案内》を、近世から繋がる厳島の系譜に位置づけることに異論はないであろう。そもそも、同じ土地の名所を主題とする以上、図像に大きな変化を加えることは困難である。横長の紙面を蛇腹状に折り畳む形式は、初三郎の沿線案内だけではなく、観光案内図に共通しているようだ。興味深いのは、《嚴嶋新案内》を含め、明治から昭和にかけて発行された厳島絵図の版元の大半が、春錦堂の瀬田律三になっていることである。《大日本三景安藝嚴島全圖》には、「BIRD'S EYE VIEW OF ITSUKUSHIMA.」という英訳が添えられており、やはり印刷・発行は春錦堂である。厳島絵図と鳥瞰図を混淆し、「嚴島全圖」を一枚のリーフレットとして観光案内図を作るアイデアの出処は瀬田律三かもしれない。そう考えると、《嚴嶋新案内》は、同時代に出版された数多くの厳島の観光案内図のひとつに過ぎない。

そうであるならば、「初三郎式鳥瞰図」は、何が特別なのだろうか。残された決定的な差異は、前述のように《嚴嶋新案内》が「此圖左右端ヲ両端ヲ接合スレバ又御島廻リノ案内」になるように、島の地形を歪めていることである。写生に基づく岷山作は勿論、「真景を写し」た「嚴島全圖」も、島の最北端は**ひじり﨑**の**蓬莱島**、最南端は**革籠嵜**であり、**腰細浦社**は南面の中央に描かれている。《嚴嶋新案内》以前に描かれた《大日本三景安藝嚴島全圖》も同様で、現実と違わない。しかし、《嚴嶋新案内》と、これに影響を受けたと思われる《大日本三景安藝嚴島全

圖》だけが事実と異なっている。

地形を変形してまで「順路」を忠実に絵画化し、ひとつの地続きの絵として一目に収めたことは、初三郎が神仏分離後の厳島の状況を反映し、名所以外の部分も克明に描いて、その時代の現実の厳島の姿を表現しようとする姿勢に相反する。その背景には、初三郎（1928）が作品に対して抱く以下の思想があろう。

> 曾ては駕籠にゆられ蓮臺にてわたりし東海道に、鐵路成り、鐵橋なり、隧道成り、更に自動車の、めまぐるしくも、さかんなる活躍を見るにつけ、私はこゝ五十年を出でずして、必ず飛行機萬能の時代の來たるべきを確信してゐる、其時に於て曾て地上に残されたる交通狀態を如實に物語るものは、我が鳥瞰圖あらずして何ぞ。蓋し現代に於ては名所と交通の關係を示して旅行者の便益に資し、併せて交通の發達と改善を促しつゝ、以て百年の後に光彩を期するもの、恰も一立齋廣重の畵風夙年振はず、風景畵の新機軸を樹立するに至つて次第に民衆の喝采を博し、後世に尊重せらるゝと其の軌を同じうせるものではあるまいか（吉田, 1928 p.7）。

すなわち、初三郎の目的は、後世のために交通のすべてを正確に記録することである。だから、地形や個々のモチーフを交通に従属させ、周辺の地形や主題に応じて、モチーフの角度や大きさを調整し、全体を破綻なく繋げることによって、ひとつの風景を完成させる。見える風景を描くことではなく、交通のすべてが一目できることが重要なのである。処女作の《京阪電車御案内》が、遠方にある琵琶湖を描いていた時から、この思想は発現していた。線路は遠距離を移動するため直線的であるが、《嚴嶋新案内》は、島の地形に沿って入り組んだ道の案内であり、ずっと複雑であった。そのため、島の真ん中に山が並ぶ厳島を一目するためには、より高度な位置から島を俯瞰し、島の北端・南端から島の裏側へと自然に地形を繋げなければならなかった。しかし、初三郎は自在に鳥瞰する技術をまだ獲得できてはいなかった。日本の交通網が広大するにつれて、本来は見えないはずの富士山や東京、樺太やハワイ、上海まで遠望するようになり、初三郎の鳥瞰の範囲は壮大になるが、これを叶えるために「初三郎式鳥瞰図」のデフォルメは、以後極端さを増してゆく。

初三郎は、近世の厳島の風景を合成・加筆・変形することによって、大正時代の風景へと改変している。色彩やタッチなどの表面的なものではなく、主題に合わせて、必要なモチーフを取捨選択し、角度や大きさに配慮しながら、ひとつの厳島を構成するように組み合わせる方法は、厳島図が時代に応じて名所を描きながら、徐々に写実へと変化を辿ってきた歴史とは逆行している。島中に散らされた桜は伝統的モチーフだが、**紅葉谷公園**が色付いていることにより、ひとつの世界に 2 つの季節が共存している。四季の表現は図らずとも日本の絵画の伝統の中にあり、本図をますます現実の風景から乖離させる。中西（2010）の「印刷写真の登場とともに、厳島真景図の描写は薄れていき、コミックな表現へと変化していく傾向が読み取れる」という言葉は、「初三郎式鳥瞰図」が持て囃された理由の一端を解き明かす鋭い指摘であろう。

5.　おわりに

《嚴嶋新案内》は、初三郎にとって 3 作目の観光案内図である。地名と御案内を組み合わせた表題、懐中できる大きさ、横長の紙面に俯瞰で風景を大きく描く構図、地域を象徴する事物を表紙と裏表紙に描き、蛇腹状に折り畳んでその間に挟む形式は、《京阪電車御案内》と《耶馬溪御案内》から引き継いでいるが、図像だけは踏襲することができなかった。なぜなら、《嚴嶋新案内》は、島であり、鉄道沿線ではなかったからである。これを解決するために、「日本全國名所圖繪の完成」を志した初三郎が、近世の名所図会に学んだのは自然である。図像を比較した結果、『藝州嚴島圖會』の「厳島全圖」の表裏の短冊を合体させ、図像としては「表一・二・三・四」を基本とした可能性が高い。それまでの厳島の名所を踏襲しつつ、時代の変化に合わせて名称を変更し、近代の施設を書き加えることにより、大正時代の厳島を描出した。《嚴嶋新案内》は、西洋の影響を受けたアール・ヌーヴォー風の色彩を遺しつつ、図像としては厳島図の系譜に連なるものである。

厳島図の系譜の中で《嚴嶋新案内》を考察したならば、春錦堂の瀬田律三によって発行された「厳島全圖」に

倣った前例があり、本図は同時代に出版された数多くの厳島の観光案内図のひとつに過ぎない。そうであるならば、「初三郎式鳥瞰図」は、ほかの観光案内図と何が違うのだろうか。その革新は、形式や主題ではなく、島の一周を一目できるように地形を改変した様式である。重要なモチーフを選び出して、近接拡大し、交通が隠れないようにモチーフの配置を調整しつつも、現実の地形と大きな齟齬が生まれないように配慮し、モチーフを組み合わせて、目的に応じた図像を創り上げる。大きく地形を改変することで、写実から遠ざかる点において、初三郎は厳島図の変遷を逆行しているが、これが同時代のほかの厳島図とは異なる個性となっている。道案内を視覚化するために、厳島の南面を、北面に無理やり合体させたことによって生じた空間の歪みは、後に「初三郎式鳥瞰図」で強化されてゆく極端なデフォルメの兆しである。矢内（1999 p.49）が指摘しているように、《京阪電車御案内》と《耶馬溪御案内》には「鉄道沿線と名所が忠実に描かれているだけで、後年のデフォルメを施した描き方は認められない」。さらに云えば、絵画的要素を徐々に強めてはいるものの、旧来の鉄道線路図に、背景と周辺の名所旧跡を付け加えた程度の描写で、視点の高さは鳥の目と云えるほど高くはなく、鳥瞰図とは云い難い。《京阪電車御案内》は、初三郎が鳥瞰図を描くきっかけにはなったが、「初三郎式鳥瞰図」の誕生と同じではない。様式のはじまりは《嚴嶋新案内》である。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたって、令和五年（2023）八月二十一日から二十五日まで、厳島において巡検調査、広島県立図書館・広島県立文書館において資料調査を行いました。御多忙のところ、錦水館、岩惣旅館、宮島歴史民俗資料館、広島県立図書館に、御協力いただきました。また、神戸市立博物館より画像を御提供いただきました。国際日本文化研究センターと早稲田大学図書館に、図版を使用させていただく許可を頂戴しました。御協力くださったすべての方々に、厚く御礼を申し上げます。

【引用・参考文献】

嚴嶋神社社務所編（1928）『嚴嶋』嚴島神社々務所
上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監（2001）『日本人名大辞典』講談社
JapanKnowledge Lib URL: https://japanknowledge-com.lib-kansai-u.idm.oclc.org/library/ 最終閲覧日 2023 年 11 月 28 日
宇治市歴史資料館（2014）『初三郎式鳥瞰図「誕生」100 年　日本パノラマ大図鑑』
海の見える杜美術館（2019）『厳島に遊ぶ―描かれた魅惑の聖地―』
大阪商船（1934）『大阪商船株式會社五十年史』
奥田卯三郎編（1929）『吉田初三郎先生作　日本全國名所圖繪　蒐集目録』観光社
菊竹倉二・神田俊也（1952）「宮島『雪舟園』（旧西方院庭園）」について」『造園雑誌』16(2)、pp.18-22
黒川修一（1990）「岡岷山とその画業」広島県立美術館『特別展　近世広島の絵画展』、pp79-82
県立広島大学宮島学センター・広島キャンパス図書館（2010）『県立広島大学図書館企画展示　美しき厳島―切り取られた姿に見る人々の想い―』
堺市博物館（1999）『パノラマ地図を旅する―「大正の広重」吉田初三郎の世界―』
菅村亨（2013）「大聖院蔵『厳島図』屏風について」『宮島学センター年報』3・4、pp.47-51
高橋修三（1991）「『厳島絵図』について」『宮島の歴史と民俗』10、pp.2-35
高橋修三（1992）「『厳島絵図』について（続）」『宮島の歴史と民俗』11、pp.2-24
高橋修三（1995・1996）「資料紹介　明治期の厳島案内記」『宮島の歴史と民俗』14、pp.31-149
高橋修三（1999）「資料紹介　明治期の厳島案内記（続）」『宮島の歴史と民俗』15、pp.2-132
高橋修三（1989）「資料紹介－宮島ホテル関係資料」『宮島の歴史と民俗』8、pp.29-112
高橋修三（2002）「『厳島絵図』を読む」野坂元良編『厳島信仰事典』戎光祥出版、pp.168-185
知念理（1997）「厳島図の振幅－広島県立美術館本の位置づけをめぐって」『広島県立美術館研究紀要』4、pp.19-31
知念理（2001）「個人蔵『厳島図』－変貌する聖地とそのエンタテイメント－」『広島県立美術館研究紀要』5、pp.1-12
知念理（2002）「個人蔵『厳島・和歌浦図』－超時空のトリック－」『広島県立美術館研究紀要』6、pp.1-13
知念理（2003）「厳島図の成立と展開に関する研究」『鹿島美術財団年報』別冊 21、pp.521-529
知念理（2004）「個人蔵『厳島・住吉祭礼図』－堺市博物館蔵「住吉祭礼図」のその後－」『広島県立美術館研究紀要』7、pp.39-46
知念理（2005）「［厳島図障壁画一覧］補遺」『広島県立美術館研究紀要』8、pp.1-5
知念理（2006）「厳島図〈II 類〉小考」『広島県立美術館研究紀要』9、pp.25-31

知念理（2007）「東京国立博物館蔵『厳島・和歌浦図』－右隻・和歌浦図の諸問題」『広島県立美術館研究紀要』10、pp.1-11
知念理（2017）「名所風俗図屏風の厳島－その類型と主題」『厳島研究』13、pp.7-13
佃雅文（1989）「芸州厳島図会の画図と詩歌」『宮島の歴史と民俗』8、pp.2-10
角田一郎（1975）「付録一　宮島の芝居小屋」薄田太郎・薄田純一郎『宮島歌舞伎年代記』国書刊行会、pp.291-309
中西僚太郎（2010）「明治・大正期の厳島を描いた鳥瞰図」『歴史人類 = History and anthropology』38、pp.82(59)-58(83)
仲山瞳・山本直人（2013）「大聖院蔵『厳島図屏風』調査報告書」『宮島学センター年報』3・4、pp.53-57
名古屋市博物館（1988）『特別展　名所図会の世界』
原田和作編（1903）『大阪商船株式会社航路案内』駸々堂
東晧伝・廣光清次郎・鹿子木幹雄・日隈健壬（2002）『ミヤジマ・プロジェクト』広島修道大学総合研究所
久野幸子（1989）「厳島・天橋立図屏風について―新出の某家所蔵作品の紹介を中心に―」『美学美術史研究論集』7、pp.91-114
堀田典裕（2009）『吉田初三郎の鳥瞰図を読む　描かれた近代日本の風景』河出書房新社
宮島町編（1992）『宮島町史　資料編・地誌紀行 1』宮島町
宮島町編（2005）『時を超えて　語り継ぎたい宮島』宮島町
三善貞司編（2000）『大阪人物辞典』清文堂出版
三宅秀和（2005）「近世名所図屏風の吉野と厳島－その組み合わせと豊臣政権との関わりについて―」『学習院大学人文科学論集』14、 pp.1-34
矢内一磨（1999）「吉田初三郎―その生涯と作品―」堺市博物館『パノラマ地図を旅する―「大正の広重」吉田初三郎の世界―』、pp.49-53
吉田初三郎（1923）『大正広重物語』大正名所図絵社
吉田初三郎（1928）「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれたか」『旅と名所』創刊号、pp.6-13

【作品画像出典】

図-1、図-2、図-4、図-5、図-6、図-7 は、「国際日本文化研究センター　吉田初三郎式鳥瞰図データベース」〈https://iiif.nichibun.ac.jp/YSD/〉より転載。

図-3 は、Google Map（2023 年 11 月現在）を参考に、筆者が作成した。

図-8 は、「Google Art & Culture」〈https://artsandculture.google.com/asset/AAFKfj0GJINwqA?childAssetId=2wHdRBg5Ytn8vw〉より転載。

図-9・10 は神戸市立博物館より御提供いただいた。

図-11 は、「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」〈https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html〉より転載。